

五 武州く上州、在村碑文の調査と補足資料

杉 仁

はじめに

近世の農山漁村の文化活動を、「在村文化」と呼んで調べている。しばらく信州中野領東江部村の在村漢学者「山田松齋」をみながら、『古文孝経』の考証と古活字本覆刻製板本の蔵版の動きも、ここ一年余で見終えた。「孝経」は、「身体髪膚これを父母に受く…」の語とともに、寺子屋など経書入門の書としてひろく知られる。みているうちに、各地の在村文化を見直す共通軸の一つになるのではないかと考えついた。

「孝経」を軸に、在村の書物出版活動を見直すと、書物としての「書物」もふくめ、少なくとも四つの動きがみえた。松齋のような考証く復刻を第一とすると、第二に在村文人の注釈書執筆、第三に中央文人の注釈書の

再板行^{以上}（別稿）、第四に孝経碑建立や教材出版の動きである。在村での孝経碑は、なぜか上州だけ、二基ものこる。

二基ともに、郷学あるいは寺子屋・私塾がらみの建碑である。これに、武州上尾宿の郷学記念碑をあわせ、ひろく在村の教育文化にかかわる建碑として、「書物出版と社会変容」研究会の調査を提案した。幸いにして六名の参加者を得、参加記も寄せられた。

筆による「書」としての文字のあり方と意味を問いつづける江戸書道史の岩坪充雄氏を筆頭に、武州上尾地域の筆子塚など教育史を出発点に地域研究をひろげている工藤航平氏、武州北葛飾郡北川辺地域の水害記念碑に谷中遊水池もふくむ河川改修の犠牲と辛酸への「鎮魂と慰霊」を読み込んだ久野俊彦氏、武士の生き方をみるなかで古戦場長久手という「場」の歴史記憶と顕彰のあり方を塚や石碑などに検証した谷口眞子氏の論考である。

各々持ち前の研究テーマが、今回の採拓行で刺激され、書き物史料としての碑文がどのような意味をもつて見えてきたか、興味はつきない。

現地では、郷土史家の榛東村柿の木坂「小池末廣」氏に多々ご教示を得た。貴重な地域史料の編著五冊も寄贈された。解散前の夕食での話題は、もっぱら小池氏の史料手法への賞賛だった。敬意をこめて篤く御礼申し上げる。なお埼玉く群馬間と榛東村内での移動は、久野俊彦氏のワゴン車で一同一緒に敏速に動けた。記して謝する。

ここでは、調査行のまとめとして、まず行程概要、ついで採拓した石碑三カ所と郷学テキスト版木について、基礎資料と若干の考察を提示しておく。

【第1日目 8/6(月)】

集合… 午前一〇:〇〇、JR上尾駅東口。

場所① 埼玉県上尾市氷川鉦神社、二賢堂碑。

参加者 岩坪充雄・工藤航平・久野俊彦・谷口眞子・

杉仁・若尾政希、六名。

場所② 群馬県榛東村天神山孝経碑・郷土史家小池末

廣氏宅・富澤家墓地。高崎泊。

【第2日目 8/7(火)】

場所③ 伊勢崎市伊与久、郷学「五惇堂」跡。

場所④ 伊勢崎市立図書館。

解散 午後五時頃、JR高崎駅。

武州上尾宿二賢堂

上尾市指定史跡、所在地 宮本町氷川鉦神社。『上尾郷二賢堂碑記』文政五年。松平定常題額、大学頭林訖(こう)（榎字）撰文、市河三亥(米)書。裏面に寄進者氏名を刻する。

「二賢堂」は天明八年（一七八八）、学僧の雲室が上尾宿で講じた郷学「聚正義塾」の学舎の呼称。上尾宿村役「山崎碩茂」らを中心に、周辺村々の協力も得て天満宮小祠の跡地に建立、朱子と菅原道真の二賢人を祀る意で「二賢堂」と名付けられた。林大学頭信敬書の学舎扁額「二賢堂」ものころ(上尾市史)。雲室の師「市河寛齋」も、「祭酒」としてかわる。

郷学建立の経過は、『雲室隨筆』がくわしい。天明八年、さそわれて「初て上尾に遊」んだことだという。

…今天下文運時を得たり、何卒郷学を此地に建んや

と談じけるに、碩茂^{（山崎武平次碩茂）}大に喜び、即ち物習

ふ人々に咄し合、幸ひに天満宮の旧地の有けるを、

此処こそとて相談速やかに極まりしか、此のとき既に七月八日なり。

予乃ち法衣を脱して、碩茂と唯二人草のむらがりしげれるを分け入りなざかりければ、皆々大に感じ我もくと立出一兩日の中にきれいになし、それより地形をせんと予も土を運びける故、皆々出精致し又四五日の中に地形の様になりたり、扱各手にく槌・杵様のものにてかたはしより打かため、我等は柱を建ん、我等は梁を上んとて忽に材木数十本集りたり。

其中に工みなるは役者にせん杯談ぜしに、本村といへる所に弥太郎といへる工の有けるか、此事を聞来て申けるは、此度有難き館の建ち候よし承りぬ、何卒職分の冥加に手間寄進仕だし遣ひ給てと申、中壁ぬる男の有りしが、是も手間寄進仕たしと出来ぬ。予も余りの事に、扱々私なき事はかくも人の心に感ずるもの哉と難有覚し、それより材木は沢山に出来ぬ。足利学に習ひ四間四面に建たりしに、又屋根草

者の近村に在しか、兩人参りて是も又手間寄進したしとて来りし故、七月八日に草をかり初めにし地に、同廿二日に柱建し、九月中頃には早落成しける。：

扱此事を早速林祭酒へも聞せ参らしければ大に感せられたり。其頃聖堂の都講は市川小左衛門^{（寛）}にて有しか、此人へ頼みければ承知被致、祭酒へも被申上予へ相談被致、聖像は恐れあれば、神祖の学は宋朝学にてまします故、朱文公こそよからめとて、廻ち朱文公と天満宮とを配食し奉り、祭酒より二賢堂といふ額字を送られて早速に彫て掛ぬ。

小左衛門も被参、十一月至日を以て釈奠の定例と定め、先づ遷座し奉り、夫より至日に小左衛門祭酒となり、郷生参り首尾能礼ととのへり。：

扱二賢堂の前に門を建、泰喬門と号し額は小左衛門被書たり。其前に塾を置き聚正義塾と号し、釈奠の時は神供所とし、常には物習う人の集り学ふ所とす。毎月朔望には駄の少年、近村の民皆来て宿役人読法す。：其後予、孝経よりはじめ、大学近思録の類講^{（略後）}之、皆々有難しとて喜びぬ。

遊歴知識人の言をきつかけに、村民だけの意志と力量

でつくられた郷学のようにすをよくしめす。

上州広馬場村の孝経碑

広馬場孝経碑は、宝暦十四年富澤文明書、文政二年建立で、榛東村指定文化財。^{〔在〕}所 榛東村広馬場字八之海道天神山。笠石ふくめ全高285cm、碑面は高サ五尺六寸五分(約172cm)、横式尺三寸八分(約72cm)の角柱四面に、古文孝経二十二章全文を刻む。

刻字は、^{〔正〕}面 古文孝経、^{〔篆〕}額 正四位下賀茂縣主季鷹。開宗明誼章第一^{〔以下第四節まで〕}。尾 寶暦十四^{〔一七六四〕}年癸未正月二十九日／富澤文明敬書／文政二^{〔一八一八〕}年己卯春建之／信州伊奈郡御堂垣外／石工守屋多藏。

きれいな平滑仕上げの角柱四面に、古文孝経二十二章全文を、七文字十六行の段毎枠付きで、字角3cm余のやや大きめの楷書で刻む。拓本をとれば、そのまま折本の法帖に仕立てられる形を工夫したと考えられる^{〔岩坪〕}。

建立者「富澤文明」延享三^{〔一七四六〕}文政八^{〔一八一八〕}年^{〔以下文明〕}。

『関東諸家人名録 毛州之部』に「黙齋 名文明 詩 広馬場 富澤良貞」とある。号黙齋また椿山、代々の寺子屋師

でもある^{〔小池未廣「榛東村の寺子屋師匠たち」〕}。俳号「桂志」で活動もしている。

文明の筆になる石造物は「二十基の庚申塔・道祖神など」^{〔小池未廣〕}におよぶという。

「宝暦十四^{〔一七六四〕}年 富澤文明書」は弱冠十七歳、「文政二^{〔一八一八〕}年建立」は、文明七十三歳。青少年期の書の孝経を、最晩年に刻碑したことになる。書はわかいころ、澤田東江に学んだという。墓誌は、「弱冠笈ヲ負テ江戸ニ遊シ、医方ヲ毛利侯持医玉邨俊的二学ビ、マタ書法ヲ東江源文龍二問ウ。皆能ク其ノ奥ヲ究ム」とする。

「天神山」は小円墳だったらしく、古信仰の場として、小さな社叢をなす^{〔富澤家の所持地という〕}。十段ほど石段をのぼると右手に手水鉢石^{〔富澤徳久元文三年寄進〕}、正面に石鳥居があり、さらに数段のぼった頂の十坪ほどに、天満宮小石祠・蚕神碑などをまつ。鳥居足・天満宮台石などに、「延享三^{〔一七四六〕}丙寅歳」、施主 廣馬場村中 同門弟中 外 近遠十箇村餘 總門弟中…、願主 富澤文次郎徳久^{〔徳久六十八歳〕}などときざむ。師匠碑が墓誌だけでないことしめす。墳墓でなく、師匠に呈した碑文一般として「師匠碑」とよぶべきであろう。

文明の祖父「文次郎徳久」の開塾について小池氏は、「三十年代中頃とすれば正徳年間」と推測する。天神山は、榛

名山東麓地域の、いわば教育記念センターであった。

鳥居額や天満宮小石祠の碑陰には、「新田岩松源慶純謹書〔印〕〔印〕」、「新田岩松源慶純謹書〔印〕〔印〕」などをきざむ。上州一帯に隠然たる勢力をもちつづけて「猫絵」でも知られた岩松氏の、在村でのあり方の一端をしめす。

石工「守屋多蔵」の本貫地「御堂垣外」は、高遠から諏訪へ北上する杖突峠の手前約一里の村。おなじ守屋姓で高遠石工として著名な「守屋貞治」の塩供村はその約一里手前。石工請負証文には「代金拾四両也…、文化十五（^ハ）年三月／^{信州高遠石工マ、}太蔵（^{碑は「守屋多蔵」}）などと記す。名人として各地に名をのこす「守屋貞治」、その系列につながる高遠石工の一人であろう。証文の「未代之後記」、「諸細工念入」、「文字彫刻等鮮明」などの語は、石に刻んで永久につたえるべき孝経の文化的価値を、石工その人が熟知していたようすをしめす。

旅稼ぎの石工は、いわゆる「周縁」から地域内の人びとへ、文化をつたえる役割をはたしたにもなるう。いわば「遊歴知識人」である。石工もふくめ在村文化における「遊歴知識人」を見直すきっかけとしたい。

これら天神山調査のあと、さきから引用してきた郷土

史家「小池末廣」氏を訪問、多々教示をうけた。筆子塚ほか石造物の地域悉皆調査および、すべての文字の読み取りと活字化による資料集刊行をすすめている。既刊の下記五冊の寄贈もうけた。

- ①『榛東村の寺子屋師匠たち』 1994.3
- ②『渋川市・北群馬郡の寺子屋師匠たち』 1995.12
- ③『渋川市・北群馬郡の寺子屋師匠たち―続―』1998.1
- ④『群馬町と旧清里村の寺子屋師匠たち

―付・隣村の寺子屋師匠たち―』 2000.1

⑤『地方の石文―渋川市・北群馬郡―』 2002.3
調査は精緻をきわめ、異体字もふくめ刻字すべて正確に活字化する。貴重な資料集といえる（^{谷口論}参考）。杉が預かり、ここでもたびたび引用してきた。謝意を再記する。

上州佐位郡伊与久村の孝経碑

伊与久村孝経碑は文化四（^{一八七〇}）年、郷学「五淳堂」^{（いじゆんどう）}に建立した。その事情を、伊勢崎藩家老「関重嶷」^{（しげたか）}／磯田邦光」撰文の「五淳堂之記」^{（群馬県史）}が語る。

「宮崎有成」ほか村々の重立ちが五淳堂に「経碑ヲ建

ント欲」し、「幕府ノ儒官柴野邦彦二謀」った。邦彦はこれを善として「竊ニ執政吉田侯二聞」した。吉田侯（寛政の遺老 松平信明か）またこれを嘉としたので「門人青木永教（ながのり）ヲシテ御府刊誤本（唐玄宗 帝宸翰）ヲ摹写セシメ、且ツ隷額ヲ白河侯二請、而して之ヲ与」えた。底本は、いわゆる御注本である。

碑は「従四尺四寸（約134cm）幅一尺七寸三分（約52cm）、横幅九寸八分（約30cm）」で、篆額は「松平定信」。孝経は正面から左側面へ碑陰右半まで、やや荒めの碑面に、字角2.4cmほどで縦50文字30行弱に刻む（字角、字数は後述）。碑陰左に跋「幕府侍問儒員柴邦彦撰」、末尾に石工「中慶雲」（岩坪論 考参照）もぎざむ。

さきの広馬場碑「七文字十六行、段毎杵付き、字角3cm余」が、道徳教化と法帖作成の兼用目的だったのとは比べ、幕藩上層の関与のもと、孝経による道徳教化そのものを目的にした観を呈する。おなじ在村孝経碑でも、異なる発想があつたとみるべきか。

「栗山」邦彦の碑跋はいう。「上毛伊与久村 邑民 宮崎有成等、孝経ヲ刻ミテ以テ郷鄰ヲ教導セント欲シ、来テ邦彦二謀」ったものである。「酒井侯（伊勢崎 藩主）」、聞テ之ヲ喜トシ、老臣関重嶷 磯田邦光等二命シテ其事ヲ督シ、

特二百歩ノ地ヲ給テ以テ弦誦（字に 勵む）ノ所ヲ構ヘ、扁シテ五惇堂ト曰フ」など、校地百歩を免税とし、藩公認の郷学として扁額「五惇堂」を下賜したとする。

「郷鄰ヲ教導」とは、具体的にになにか。「孝八百行ノ本、有成ヲ意ヲ用ユル、本ツク所ヲ知ルト謂フベシ」として、「村民、能ク朝夕観省シテ和順シ、以テ俗ヲ善スレハ、則チ独リ孝ノ身ヲ立ツベキノミナラズ、忠モマタ君ニ移ルベキ也」と記す。宮崎有成ら村民有志が、地域民を教導しようと孝経碑を建てた。みな村民が朝夕これを目にすれば、よく和順して善導される。身についた民の「孝」は、領主にたいする「忠」としてはたらく。

いわば「孝即忠」の論理の強調である。家内く村内の生活道徳と領主への服従道徳を一貫する地域道徳、その教導にふさわしいとして、在村の孝経碑の建立活動を賛美したことになる。「関重嶷」は折からの藩政改革をすすめる一人である。郷学や孝経碑の建立促進は、藩政改革の一環とも考えられる。

「宮崎有成」は、墓誌（寺門静軒撰并書 篠本弘明『境町碑墓銘集』所収）によると、父祖から苗字帯刀を許された伊勢崎藩御用達商人の一人で、関重嶷らの藩政改革に呼応し支える立場にある。この孝経

碑は、窮乏する藩財政をささえる御用豪農商層が発起し、幕閣、幕儒、大名文人、藩主、家老など領主各層がふかくかわって「民俗醇朴」を善導する。地域教化策の象徴だったといえよう。

文化面では在村最高レベルを揃えた孝経碑だったが、社会面をみれば、民俗醇朴どころではなかった。伊与久村に直接かわる史料はみえないが、建碑の文化四年前後、40年間の寛政く文政期、少なくとも21件の騒動史料が上州一円にのこる。利根川一つ向こうの北武州はさらに多く、寛政年間だけで11件にのぼる^{（保坂智編『百姓』探史・史料集成 各巻末年表）}。村落最上層の御用町人ら豪農商から藩上層部く幕政中枢部く幕儒・藩儒にいたるまで、一貫する危機感が強まっていたことをうかがわせる。孝経碑建立の背景というべきか。

伊勢崎市立図書館「小学」版本

ところで発足した五惇堂など伊勢崎郷学では、テキスト板行に在村ならではの工夫をこらしている。地域から版費提供者をつのり、その氏名一名ずつを「柱刻」にの

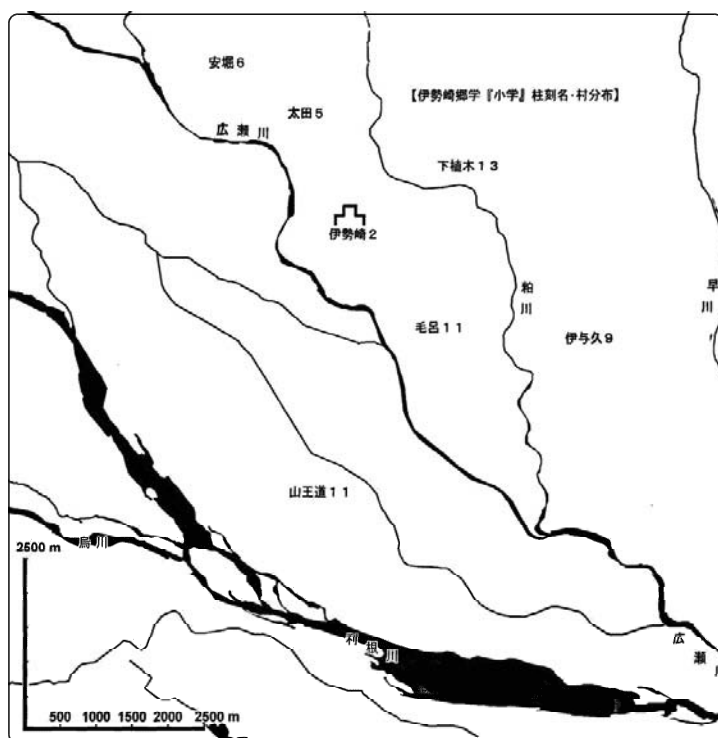
こしたのである。いかにも在村文化らしい。

鈴木俊幸氏によると、架蔵本「上毛伊勢崎領塾蔵」『小学』の書誌は、「^{〔題〕}小学内篇 改点／小学外篇 改点、^{〔内〕}小学内篇／小学外篇、^{〔柱〕}小学〈魚尾〉〈丁付〉〈魚尾〉〈助刻者名〉、^{〔題〕}小学内篇終、^{〔裏〕}文政四年辛巳辛巳冬至日／上毛伊勢崎領塾蔵」となる。「助刻者名一覧」も提供された。

版本百数十枚は、二箱分全揃いで伊勢崎市立図書館が一括保存する^{（さきの岩坪『論考参照』）}。人名の居村名の確定をすすめており、中間データも教示された。伊勢崎郷学は全25校^{（『原』、そのうち「積善堂（伊勢崎町）／会輔堂（安堀村）／正心堂（太田村）／遜親堂（茂呂村）／正誼堂（下植木村）／五惇堂（伊与久村）／遜梯堂（山王道村）／嚮義堂（上樋越村）」、の八郷にかかわる全68名分の村名が判明している）}。

ここでは、在村における書物出版の稀少な事例として、鈴木氏および図書館中間データによる「柱刻人名・村名一覧」と「人数村名分布図」をしめす。藩域各地の郷学を中心に、抛金者があつまるようすがうかがえる^{（作ってみてあまり有効ではなかった）}。鈴木氏および伊勢崎図書館に感謝を呈し、全貌公表をまきたい。^{（二）元}

伊勢崎郷学版『小学』柱刻人名・村別人数分布図



通番	標題	丁目	項	氏名	村名	郷学名
1	小学内篇	1	序	大谷思之	伊与久	五惇堂
2	小学内篇	2	題辞	宮崎有成	伊与久	五惇堂
3	小学内篇	1	立教	高井環	伊与久	五惇堂
4	小学内篇	2	立教	高井直	伊与久	五惇堂
5	小学内篇	3	立教	宮崎時敏	伊与久	五惇堂
6	小学内篇	4	立教	新井直則		
7	小学内篇	5	立教	齊藤敦廣		
8	小学内篇	6	立教	剛毅		
9	小学内篇	7	立教	成美		
10	小学内篇	8	立教	以禮		
11	小学内篇	9	立教	八木道高	樋越	嚮義堂
12	小学内篇	10	明倫	八木守善	樋越	嚮義堂
13	小学内篇	11	明倫	設楽学院	樋越	嚮義堂
14	小学内篇	12	明倫	設楽旦寛	樋越	嚮義堂
15	小学内篇	○13	明倫	八木敬美	樋越	嚮義堂
16	小学内篇	14	明倫	八木昌芳	樋越	嚮義堂
17	小学内篇	15	明倫	設楽典賢	樋越	嚮義堂
18	小学内篇	16	明倫	上樋越書生	樋越	嚮義堂
19	小学内篇	17	明倫	井上明善	明善	
20	小学内篇	18	明倫	一		
21	小学内篇	19	明倫	本密		
22	小学内篇	20	明倫	秀秋		
23	小学内篇	21	明倫	義記		
24	小学内篇	22	明倫	菊池思之	茂呂	孫親堂
25	小学内篇	23	明倫	石原明敏	茂呂	孫親堂
26	小学内篇	24	明倫	品川茂	茂呂	孫親堂
27	小学内篇	25	明倫	井上廣茂	茂呂	孫親堂
28	小学内篇	26	明倫	石原宣秀	茂呂	孫親堂
29	小学内篇	27	明倫	菊池起義	茂呂	孫親堂
30	小学内篇	28	明倫	節之		
31	小学内篇	29	明倫	嘉兼		
32	小学内篇	30	明倫	板垣寛快	下植木	正誼堂
33	小学内篇	31	明倫	柳澤行厚	下植木	正誼堂
34	小学内篇	32	明倫	板垣宗至	下植木	正誼堂
35	小学内篇	33	明倫	板垣吉根	下植木	正誼堂
36	小学内篇	34	明倫	柳澤啓典	下植木	正誼堂
37	小学内篇	35	明倫	條常		
38	小学内篇	36	明倫	吉澤惟孝	安堀	会輔堂
39	小学内篇	37	明倫	柿沼興孝	安堀	会輔堂
40	小学内篇	38	明倫	栗原惟	山王道	孫悌堂
41	小学内篇	39	明倫	柿沼矩吉	安堀	会輔堂
42	小学内篇	40	敬身	町田寛高		
43	小学内篇	41	敬身	荒木豪孝		
44	小学内篇	42	敬身	正照		
45	小学内篇	43	敬身	明平		
46	小学内篇	44	敬身	典哲		
47	小学内篇	45	敬身	当長		
48	小学内篇	46	敬身	大和致知	山王道	孫悌堂
49	小学内篇	47	敬身	栗原正誼	山王道	孫悌堂
50	小学内篇	48	敬身	高庭貴義		

通番	標題	丁目	項	氏 名	村名	郷学名
51	小学内篇	49	敬身	高庭近義		
52	小学内篇	50	敬身	宮田秀壽	山王道	孫悌堂
53	小学内篇	51	敬身	大和知義	山王道	孫悌堂
54	小学内篇	52	稽古	高教		
55	小学内篇	53	稽古	吉根	下植木	正誼堂
56	小学内篇	54	稽古	知規		
57	小学内篇	55	稽古	光義		
58	小学内篇	56	稽古	孟平		
59	小学内篇	57	稽古	勇学		
60	小学内篇	58	稽古	設楽	伊勢崎	
61	小学内篇	59	稽古	大澤春意	茂呂	孫親堂
62	小学内篇	60	稽古	細野由周	太田	正心堂
63	小学内篇	61	稽古	高橋精一	山王道	孫悌堂
64	小学内篇	62	稽古	設楽為房		
65	小学内篇	63	稽古	竹内洗光		
66	小学内篇	64	稽古	正木光英		
67	小学内篇	65	稽古	真静		
68	小学内篇	66	稽古	板垣政正	下植木	正誼堂
68	小学内篇	66	稽古	板垣政正	下植木	正誼堂
69	小学内篇	67	稽古	加藤秀脩		
70	小学内篇	68	稽古	大嶋行英	太田	
71	小学内篇	69	稽古	竹澤宜恭	太田	正心堂
72	小学内篇	○70	稽古	内山記起		
73	小学外篇	1	嘉言	板垣芳風	下植木	正誼堂
74	小学外篇	2	嘉言	政晟		
75	小学外篇	3	嘉言	佳考		
76	小学外篇	4	嘉言	重長		
77	小学外篇	5	嘉言	栗原義□		
78	小学外篇	6	嘉言	沼田熹以		
79	小学外篇	7	嘉言	栗原榮永	山王道	孫悌堂
80	小学外篇	8	嘉言	勝房		
81	小学外篇	○9	嘉言	為学		
82	小学外篇	10	嘉言	関根尚昌	伊勢崎	責善堂
83	小学外篇	11	嘉言	関根知哲	伊勢崎	責善堂
84	小学外篇	12	嘉言	廣光		
85	小学外篇	13	嘉言	矩義		
86	小学外篇	14	嘉言	朝敬		
87	小学外篇	15	嘉言	美卿		
88	小学外篇	16	嘉言	惟重		
89	小学外篇	17	嘉言	大谷思之		五惇堂
90	小学外篇	18	嘉言	高井環		五惇堂
91	小学外篇	19	嘉言	宮崎時敏		五惇堂
92	小学外篇	20	嘉言	齊藤敦廣		
93	小学外篇	21	嘉言	剛毅		
94	小学外篇	22	嘉言	設楽学暁	樋越	嚮義堂
95	小学外篇	23	嘉言	上樋越書生	樋越	嚮義堂
96	小学外篇	24	嘉言	上樋越書生	樋越	嚮義堂
97	小学外篇	25	嘉言	上樋越書生	樋越	嚮義堂
98	小学外篇	26	嘉言	井上明善	明善	
99	小学外篇	27	嘉言	一 一		
100	小学外篇	28	嘉言	井上廣茂		

通番	標題	丁目	項	氏 名	村名	郷学名
101	小学外篇	29	嘉言	菊池起義	茂呂	孫親堂
102	小学外篇	30	嘉言	節之		
103	小学外篇	31	嘉言	柳澤行厚	下植木	正誼堂
104	小学外篇	32	嘉言	板垣宗至	下植木	正誼堂
105	小学外篇	33	嘉言			
106	小学外篇	34	嘉言	條常		
107	小学外篇	35	嘉言	栗原惟一		
108	小学外篇	36	嘉言	柿沼矩吉	安堀	会輔堂
109	小学外篇	37	善行	町田寛高		
110	小学外篇	38	善行	荒木豪孝		
111	小学外篇	39	善行	栗原正誼	山王道	孫悌堂
112	小学外篇	40	善行	高庭貴義		
113	小学外篇	41	善行	高庭近義		
114	小学外篇	42	善行	宮田秀壽	山王道	孫悌堂
115	小学外篇	43	善行	設楽	伊勢崎	
116	小学外篇	44-60	善行	板垣改正	下植木	正誼堂
117	小学外篇	45-50	善行			
118	小学外篇	46	善行	政晟		
119	小学外篇	47	善行	重長		
120	小学外篇	48	善行	加藤秀脩		
121	小学外篇	49	善行	竹澤宜恭	太田	正心堂
122	小学外篇	50×	善行	栗原義□		
123	小学外篇	51	善行	小暮蔵宗	太田	正心堂
124	小学外篇	52	善行	宮崎有成	伊与久	五惇堂
125	小学外篇	53	善行	高橋精一	山王道	孫悌堂
126	小学外篇	54	善行	板垣寛快	下植木	正誼堂
127	小学外篇	55	善行	菊池思之	茂呂	孫親堂
128	小学外篇	56	善行	石原明敏	茂呂	孫親堂
129	小学外篇	57	善行	品川茂		孫親堂
130	小学外篇	58	善行	吉澤唯孝	安堀	会輔堂
131	小学外篇	59○	善行	柿沼興孝	安堀	会輔堂
132	小学外篇	60×	善行	大和致知	山王道	孫悌堂
133	小学外篇	61	善行			
134	小学外篇	62	善行			
135	小学外篇	63-72	善行			
136	小学外篇	64	善行			
137	小学外篇	65	善行			
138	小学外篇	66	善行			
139	小学外篇	67	善行			
140	小学外篇	68	善行			
141	小学外篇	69	善行			
142	小学外篇	70	善行			
143	小学外篇	71	善行			
144	小学外篇	72×	[見返]文政4年辛巳			

上毛 伊勢崎領塾蔵